

背広と野良着

橘 左京 作

ある朝、二階で出勤前の身支度をしていたら、一階の台所から妻の声が出た。

「あなた、今週の金曜日は古着を出す日よ。使っていない背広があるみたいだけど、出してらどうなの？」

月に一度、ごみステーションに古着・古布を出す日がある。妻は時々、古くなって着なくなつた自分の服と体が大きくなって着られなくなった子供の服を大きなビニール袋に入れてごみステーションに出している。

私の洋服ダンスの中には春夏物の背広が七着吊るしてある。隣町の実家にある洋服ダンスには秋冬物の背広が七着吊るしてある。毎年、四月になると実家から春夏物を持ってくる。秋冬物はクリーニングが終わつた後、実家の洋服ダンスで保管する。十月になると春夏物をクリーニングに出して、実家から秋冬物を持ってくる。クリーニングが終わつた春夏物は実家の洋服ダンスで保管する。毎年、この繰り返しである。家と実家にある洋服ダンスには、春夏物が秋冬物のどちらかの背広を七着ずつ入っている。

私は春夏物と秋冬物の背広を毎年一着ずつ新調している。使用して七年経つた古い背広は処分している。馴染みの紳士服店に古くなつた背広を下取りしてもらい、代わりに新しい背広を仕立ててもらおう。しかしこの紳士服店では、いつも背広の下取りをやっているわけではないので、古着・古布の日に古くなつた背広を妻や子供の古着と一緒にごみステーションに出すこともある。

最初の頃は、ごみステーションに背広を出すことに躊躇した。「燃やすごみ」として焼却処分になると思つていたからだ。長年、仕事着として自分と苦楽を共にした思い出がずつしりと詰まつた背広が焼却場で焼かれると思うと、我が身が焼かれるような気持ちになり耐えられなかった。

古着は「資源ごみ」として回収されているという話を妻から聞いてからは、ごみステーションに背広を出すことに抵抗を感じなくなった。しかし今度は「資源ごみ」として回収された背広の行方が気になってきた。そこで、いつも利用する紳士服店に下取りされた背広がどうなるのか聞いたところ次のことが分かつた。下取りされた背広は専門の回収業者によつてリサイクルセンターに持ち込まれ、機械で細かく裁断、圧縮され反毛ウエルトに

生まれ変わる。

反毛ウエルトは自動車の断熱材や荷物の緩衝材など幅広く利用されている。「資源ごみ」としてごみステーションに出された背広も同じような用途に再生されているのだろう。七年経って古くなった背広とはいえ、まだ何年間は着られる。できれば「背広」のまま再利用してもらいたい。背広に対する愛着を捨てきれずにいる元所有者としての率直な気持ちだ。

六年前までは古くなった背広の行き先は決まっていた。親父だ。背格好が私と似ている親父が私の背広をそのまま「背広」として使ってくれた。実家の洋服ダンスに保管するため、四月と十月にクリーニングの終わった背広を実家に持って行った時に使わなくなった背広を親父に譲っている。親父は「今年秋の農家組合の旅行に着て行きたい」と言っただけの御下がりの背広を満足そうに受け取ってくれた。

戦中生まれの親父は専業の米農家だった。親父の仕事着は野良着。野良着は牛馬や鋤を使って農耕作業をしていた頃の農家の仕事着だ。丈夫な布地と外傷からの保護や防虫も考えた簡略な仕立て。木綿の野良着は保温性があり、着やすく、活動的だ。当時の米作りは全てが手作業だった。田んぼの土と汗の匂いが付いた親父の野良着の匂いを今も覚えている。

農家にとつて重労働だった田植えや稲刈りなどの作業が機械化された現在、農家の仕事着は、軽量性、機能性、耐久性に優れた化学繊維中心の作業着に変わった。儉約家の親父は自分用に新しく背広を仕立てることはしないで、私の御下がりの背広を使ってくれた。

背広は親父の仕事着ではないが、年に数回、晴れの舞台で背広を着る機会がある。その晴れの舞台が農協など農業団体の会議や公の場で行われる表彰式である。親父はその時に「晴れ着」として、私から譲られた背広を着て出かける。また農家組合の旅行や中学校の同級会に出かける時もわざわざ背広を着ていくことが多かった。たまたま背広を着るものだからワイシャツとネクタイ、背広の色がちぐはぐになっていることがあるが親父は全く気にしない。

そんな親父が亡くなって六年が経った。今年は何回忌の年忌法要だ。実家の仏壇に掛けである親父の遺影は緊張した面持ちをした背広姿の親父だ。品質の高い米作りをしたというだけで、農業団体から表彰を受けた時に撮った写真である。ワイシャツ、背広、ネクタイの組み合わせはばっちりときままっている。